

2) やんばる環境学習

仲松由美子¹・国広潮里¹

キーワード：学校教育 総合的な学習 通年学習 出前授業 地域連携 普及啓発

1. はじめに

学校教育と連携した普及啓発事業の確立は、そこに通う児童生徒の環境保全意識の向上を図る上で重要な要素の一つである。当財団では、沖縄県内の児童生徒の地域環境への興味関心や環境保全への意識向上を図るため、平成26年度よりやんばる環境学習を展開している。

本事業では、県内北部地域の小学校や教育委員会等と連携し年に3回以上の学習を継続する「通年学習プログラム」および1~2回完結型の「短期学習プログラム（出前授業）」を、県内各地の学校を対象に展開した。

2. 実施結果

1) 通年学習プログラム

名護市内3校、本部町内2校において通年学習を展開した。主に総合的な学習の時間を利用して行い、適宜、理科・国語などの単元にも組み込んだ。地域の水生生物や沖縄の自然について、当財団職員による解説や野外活動等を通じた学習を行った。

(1) ウミガメから学ぶ環境学習

ア) 名護市立小中一貫教育校 緑風学園

平成26年度に連携を開始した緑風学園では、複数学年にわたる学習体制が確立している。実施場所は緑風学園内施設、美ら島自然学校、学区内の河川や海岸等であった。学習は、3年生の「ウミガメ」をきっかけとし、4年生で「川の生き物と環境」、5年「地域の食」と地域の環境や文化を体系的に学ぶことを意識した学習展開を行った。今年度は4年生を対象に、調査研究の一環である「ウミガメ標識放流調査」に協力してもらった。7月の本調査において、放流した10個体中1個体が10月に大阪湾で再捕獲され（写真-1）、回遊ルートの一部をデータとし

て取得することができた。調査に協力してもらうことで、より地域環境について深く考えるきっかけとなり、当財団の調査研究についても理解を深めた。例年通り3月には、各学年ともに口頭およびポスター等での成果発表を行い、一部は美ら自然学校において展示している。



写真-1 大阪で再捕獲されたアカウミガメ

イ) 名護市立名護小学校、稲田小学校

3年生を対象に、「イノアの生き物」や「ウミガメ」をテーマに学習を実施した。名護小学校では、1学期にイノアの生き物、2学期にウミガメを題材とした。財団職員が講師として危険生物を含めたイノアに生息する生きものについて解説した後、本部町備瀬区でのイノア観察会を実施した。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、クラスごとに3回に分けて実施した。ウミガメの学習では、「生態や形態」「ウミガメをとりまく環境」について講義した他、ウミガメ幼体を用いた形態観察を行った（全5回）。稲田小学校では、ウミガメの生態や環境問題について学習を行った（全2回）。

ウ) 本部町立上本部学園

海洋博公園を活用した複数学年にわたる通年学習として事業を開始、上本部学園内、海洋博公園内各施設で実施した。学習構成は、既に事業部海獣課と連携して実施している3年生の

¹普及開発課

「ウミガメから学ぶ環境学習」を基本とし、海から川、人の暮らしを連動させることを意識づけした。各学年のテーマは、4年「地域の農業と自然」、5年「陸域の生き物と環境」、中学3年「地域の情報発信」としている。実施にあたり、海洋博公園内各施設の担当課および総合研究センター各課室の職員と連携し、事前学習や体験活動を行った。



写真-2 陸域の生き物と環境：海洋博園内（5年生）

エ）本部町立瀬底小学校

小学5-6年生を対象に、本部町健壁の埋め立て漁礁を活用した「サンゴ観察会」を試みた。干潮時には歩いて行くことが可能で、ブロックに付着したサンゴ類を継続的に観察することができる。児童各々で調査するサンゴ群体を決め、写真記録および折尺による計測を月に一度実施。4, 5, 6, 9月にそれぞれの様子を記録することができた。2月には調査記録をまとめ、成果発表とした。今後も地域環境を活かした学習プログラムとして継続する。



写真-3 歩いて行けるサンゴ観察ポイント（5-6年生）

2）短期学習プログラム（出前授業）

地域の環境や動植物および文化に対する興味関心を引き出すことを目的に、1~2回完結型の短期学習プログラムを、県内の小中学校および高等学校を対象に実施した。実施にあたっては、総合的学習の時間の他、国語や理科、生活の単元授業と

関連づけた内容で構成した。令和4年度は県内17校から19件の依頼を受け実施した。学習テーマは「ウミガメ」「有孔虫」「南西諸島の希少な生きもの」「沖縄の食文化」等で、依頼内容に応じて総合研究センター職員を講師として派遣した。今年度は保育園や幼稚園からの依頼もあり、未就学児を対象とした内容や教材の開発にも着手した。



写真-4 出前授業：未就学児用のウミガメのめりえ（港川保育園）

3. 成果の公表

本事業は、学習プログラムの開発を兼ねており、各学校等で行った事業の効果や手法の検討を進めている。今年度、未就学児用に開発した教材を教育関係者とブラッシュアップを行い、次年度以降広く活用することを目指す。

引き続き、地域と財団の特色を生かした学習プログラムや教材の開発を進める。

4. 外部評価委員会コメント

普及啓発事業もよくやっている。しかし、このような事業は、それを行う担当者がいかに自分のやっていることを表に出していくかで決まる。その点で、担当者はもっとテーマ性を持って研究することが望ましい。例えば、ウミガメも産卵場の調査や幼体の放流だけでは時代遅れになってしまう。幼体の時期の生態解明など新しい機軸を打ち出すべきであろう。その結果をワクワクしながら、住民と見守るのが望ましい（亀崎顧問：岡山理科大学 教授）。